

## マラソン講座 7/27 子どもの“声”を聞く

「“声”を聞き取り合って、民主的な学びと学校生活を紡ぐ」として、大阪体育大学の八木 秀文さんに“教師の仕事とは”を語っていただきました。参加者は 34 名(会場:17 名、オンライン:17 名)で関心の高さを感じました。

いま学校はほんとに忙しきせられています。そういった状況の中、私たち教職員の仕事に大きな変化が起きようとしています。その変化に気づくためには、広い視点で見る必要があります、そのための学習が必要になります。

八木先生の話には、多くのヒントがちりばめられていて、あっという間の 2 時間でした。



### 参加者の感想から

○「教師の仕事」について、とても考えさせられた 2 時間でした。教師の専門性を担保していくためにも、自分が子どもたちとどのような姿勢で関わっていくかをこれからも考え続けていきたいと思います。「学びは他者を必要とする」という言葉がすごく心に残っています。

○自分の仕事が創造性が失われ専門性がなくなっていると感じながら、日々忙しく子どもたちに向き合っているのを感じています。それでも子どもの声を聞くこと。そこから子ども同士をつなぎ、願いを引き出しみんなのものにしていくこと大切にしていきたいと最後の話から強く思いました。ありがとうございました。

○学校を経済指標で捉え直すことで、学校が「統治システム」になっていくことへの危機感が見えてきました。

○「ICT の奴隷か ICT を奴隷か」このことをずっと考えながらお話をききました。将来がおそろしい...自分も児童も。全く ICT は使えてないと思っていましたが、作品のみせ合い(図工)、新聞づくり、クイズ会社などで ICT を少しはしもべにできてる!と思えてうれしくなりました。教員の仕事が知識集約型と言われるように専門性を磨きます。

○“働き方改革”に乗っかって、自分で考えたり問い直したりすることや、学び続けることをやめてしまっている一面があるなと思いました。“学力”を高めることを目的とするならば、授業がうまい先生がオンラインで授業(というか講義)をして、担任は授業外のことをすればいい、と言っている人がいました。教師のなり手が少ない中で、それも有効にも思えますが、そうなるといろいろな子がいる集団で、他者を感じながら生活し、経験し、学ぶ機会がなくなってしまうと思いました。教師の仕事がそういうものであってほしくないと思いました。

○子どもと教師を「奴隷化」する学校システム、「大量のマック・ワーカーを養成する」学校、そのための教師という仕事...経済学を学んでおられる八木先生のお話は、今の日本の状況をシビアーに講義してくださったと思います。知っておくことで、取り込まれたくないという意識をもつことができます。



○そもそも、公立学校の発生は、その時代の社会の権力をもっている人々の必要性から発生し、変化しながら今に至っている存在だと思っています。今日のお話は、権力者の視点から学校を見つめなおすことができるものだったと思います。「本来の学校」という言葉を八木先生は使いました。日本において「本来の学校」の姿というのは敗戦後の逆コースが始まるまでのわずかな期間の学校の姿のことだったのかと思います。わずかな期間でしたが、日本に民主主義、平和主義がもたらされ、まさに民主教育・平和教育を政府も掲げて2年間くらいのわずかな期間行ってきました。それ以後、民主教育＝人格の完成、官製(能力主義)教育＝人材育成という構図となり、今は民主教育陣営が隅に追いやられている気がします。しかし、世界の主流は「子どもの権利条約」「子どもの学習権」のように民主教育の側にあります。これは現在の人類が到達した「人権」として頂点でもあります。この子ども観、学習権を学び、学校で生かすことが「本来の学校」を築いていく力になると改めて思いました。